



日本統計学会 会報 2019.10.30 No. 181

発行—— 一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-3234-7738
編集責任—山下 智志 (理事長) / 玉置 健一郎 (庶務理事)
小池 祐太 (広報理事) / 明石 郁哉 (広報委員)
鎌谷 研吾 (広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：統計学とデータサイエンス	……………	萩原哲平… 10
……………鎌倉稔成… 1	……………	小池祐太… 11
2. 統計学会各賞受賞者のことば	……………	菅澤翔之助… 11
2.1 第24回日本統計学会賞 ……小暮厚之… 4	……………	仲北祥悟… 11
2.2 第15回日本統計学会統計活動賞	……………	
……………国立大学法人 滋賀大学… 5		
2.3 第15回日本統計学会統計教育賞	……………	
……………一般社団法人日本品質管理学会	……………	
……………TQE 特別委員会… 6	……………	
……………塩澤友樹… 7		
2.4 第13回日本統計学会研究業績賞	……………	
……………P.J. Brockwell・松田安昌 (共同受賞) …… 8		
2.5 第12回日本統計学会出版賞 ……竹内 啓… 8		
2.6 第33回小川研究奨励賞 ……茂木快治… 9		
2.7 第1回 ISI 東京大会記念奨励賞	……………	
……………今泉允聡… 10		
3. 第14回日本統計学会春季集会のお知らせ (第一報)	……………	山下智志・稲葉由之ほか… 12
4. 第2回細谷賞の公募……………照井伸彦… 12		
5. 理事会・委員会報告 (2019年7月13日開催) …… 13		
6. 2019年役員・代議員協議会記録…………… 15		
7. 博士論文・修士論文の紹介…………… 15		
8. 新刊紹介…………… 16		
9. 受賞紹介…………… 16		
10. 学会事務局から…………… 16		
11. 投稿のお願い…………… 17		

1. 統計学とデータサイエンス

鎌倉 稔成 (中央大・理工 教授, 前日本統計学会理事長)

昨今、データサイエンスに関わる巻頭言が多くなり、ましてや竹内先生が「データ学のすすめ」を会報No.179に書かれていることもあり、少々もう満腹と言われるかもしれないが、ご容赦願いたい。

私と統計との出会いは、中学生の頃の長野県統計グラフコンクールへの応募からである。「統計グラフ全国コンクール」の第14回か第15回の頃だったと記憶している。後に理事長となり、日本統計学会の職務として同コンクールの審査員をすることになった折には、ここまで統計に関わり、ほ

ぼ半世紀を超えて、再度グラフコンクールにコミットすることになるとは、縁とは思えないものだった次第である。当時、一緒に統計グラフを作成した合津直枝氏は女流映画監督となり、「幻の光」のプロデュース、「落下する夕方」の映画監督として活躍している。

出会った頃の統計といえば社会科の資料にある、棒グラフや円グラフによる、国際経済や地域経済の把握だった。国別順位や穀物の取れ高を記憶したりするのはあまり楽しいものではなかった。その次は、高校の博物会 (生物部) における孔辺細

胞の測定データの分析である。たまたま、高校にセイコーの計算機があり、それを使って平均、分散を計算したことを記憶している。初めてプログラミングをして結果が出た時には感動したものである。言語はセイコー独自のものであり、1969年当時は大学ですら一般学部学生が自由に使える計算機はなかったと聞いている。そのような高価な「おもちゃ」は「エラトステネスの篩」のアルゴリズムを実装して素数判定して、数学好きの仲間を楽しませてくれた。

大学に入学し最初は化学工学を目指していたが、統計学が活用できる分野として「経営工学」があることを知り、そちらを専攻することになった。実は、つい最近知ったことでののだが、2018年の中央大学研究開発機構教授の檜山爲次郎先生の最終講義にあたり、東工大の溝呂木先生のことをお聞きしたときのことである。檜山先生は日本の有機化学者で京都大学大学院工学研究科名誉教授でもあり、クロスカップリング反応の研究者として世界的にも知られている。2010年のノーベル化学賞の北海道大学の鈴木章名誉教授と、米バドュー大学の根岸栄一特別教授、米デラウェア大学のリチャード・ヘック (Richard Heck) 名誉教授との共同受賞は記憶に新しい。檜山先生も候補者の一人であったが、檜山先生によれば、ヘック先生より1年も早く「パラジウム触媒クロスカップリング反応」を発見して論文にしていた先生が溝呂木勉東工大助教授であったとのことである。この反応は現在は溝呂木-ヘック反応と呼ばれている。残念ながら、溝呂木先生は47歳の若さでお亡くなり、ノーベル賞の受賞とはならなかった。ちょうど私が大学に入ったころ、溝呂木先生はこの研究を推し進めていたのである。だから、どうだというわけでないが、私も化学工学の分野であのまま頑張っていれば、という気もしないわけではない。

統計学はデータ分析の学問と言ってもそうしかられることはないのではないかと思うようになってきたが、未だにデータ分析は学問ではないという人も少なくはない。クロスカップリング反応にしても、現在は様々な触媒を組み合わせるその膨

大な実験データを統計分析することにより、効率のよい実験と最適な材料が見つけれられると考えている。最近のことばでいえば、マテリアル・インフォマティクスの問題である。

データサイエンスは統計学とコンピュータサイエンスの高度な融合であると考えている。この融合ができるかどうかにかかわらずデータサイエンスの学問が成り立つかがかかっているが、実に難しい問題である。数学に属している統計学の研究者にとり、「定理」のある論文が多くの場合評価対象となり、データ解析の論文は低く見られる傾向がある。このようなことから完全な両者融合が必要であり、竹内先生の言われるように「データ学のすすめ」が重要である時期に来ているにも関わらず、その学問分野の評価尺度が整っていない。私も学生時代に指導教授に、データ解析だけでは論文にはならないということをよく言われたことを記憶している。

データに隠された「不変量」をどのように計算するか、またその不変量を見つけられるか、という理論的問題が1つのカギとなるかもしれない。

増山先生は晩年、変動係数の研究をされていた。変動係数はスケールに依存しない、1つの不変量であり、生物の種を越えて血液組成に関わる変動係数は変わらないというような話をされていた。

また、伊理先生は中央大学に赴任してから1997年に「私立大学ハイテク・リサーチ・センター」を創設され、その中で「統合型地理情報システム」研究グループを立ち上げられた。わたしもその研究グループで「GISの視点から見た社会統計の研究」、「社会統計の視点から見たGISの研究」というテーマを与えられ、5年間の研究を行った。その中で伊理先生は「デジタル標高データに基づいた地形学」の研究で地形が満たすべき定性的・位相的な性質を勾配とヘシアンから作られる不変量としてその研究を行い、土砂崩れなどの災害の基礎となる尾根線、谷線などの理論研究の礎を築いている。

データサイエンスでは計算機を十分に使える必要があるが、この点についてはどうであろうか。

1970年東大に情報科学研究施設（後の情報科学科）、東工大に情報科学科、京都大学に情報工学科とコンピュータに関わる学科ができています。当時まだこうした分野は黎明期であり、統計学との融合はまだまだ遠い存在であった。統計学はソロバンと計算尺で十分とは言わないまでも、少ないデータでは最小2乗法を解くには、一晩の徹夜でなんとかあった時代である。それに比べ現在は自前のパソコンでRやPythonを動かして様々な統計計算ができるようになってきていることは隔世の感がある。

現在は1960年代のFortran, APL, Lispを使うユーザは少ない。私が統計数理研究所に入ったときにはIBMのAPLを研究に使っている研究者は多かったが、今は皆無である。ただし、APLやLispはRやPythonの言語に今でも生きている。計算機教育をまともに受けていなかったあの頃の世代は自前でデータ分析やシミュレーションによるアルゴリズム評価のために自学自習をした。これもパズル的にアルゴリズムを考えるには楽しいものであった。

昨年のDyalogAPLのCompetitionの課題問題の1つにビルの高さのデータをベクトルとして持ち、たとえば、 $x \leftarrow 5\ 5\ 2\ 10\ 3\ 15\ 10$ のように高さのベクトルが与えられたとき、0地点から見て見えるビルの数を返す関数を1行で書きなさいという問

題があった。この場合、5,2は5の裏側にあって見えず、10は5より高いので見え、以下同様にして3は10の裏にあって見えず、15は一番高いので見え、10は10や15の影で見えず、合計3つのビルが見えることになる。正解例は $\{p(\neq)\ \boxminus\ \setminus\ \omega\}x$ である。デンマークの金融業界のプログラムはDyalogAPLで書かれているということである。パズルとしては面白いが、可読性に欠けるという批判はあたらなわけではない。

Rubyの開発者として著名な松本氏は将来の言語の1つとしてAPLをあげている。1つの学問体系として考えて行くにはその王道をきちんと整理して教育していく必要がある。データサイエンスは実学であり、結果が勝負であるので、細々と続けている言語にも復活の機会はある。

とりとめない文章となってしまったが、データサイエンスを育てるためには、統計学とコンピュータサイエンスが高度に融合する必要があり、そのためにはお互いの領域を尊重することである。これは簡単そうでむずかしい。またデータが生まれてくる領域とも同じ関係が必要である。ときに、データサイエンティストはその領域のプロになることも必要である。このことが、統計学科の存在を否定してきたことでもあるが名前を変えて今こそがチャレンジのときでもある。

2. 統計学会各賞受賞者のことば

2019年9月10日、統計関連学会連合大会において、日本統計学会各賞の表彰式がありました。ここに、受賞者のみなさまから、受賞のことばをいただきましたので、以下の順にご紹介させていただきます。

- ・第24回日本統計学会賞：小暮厚之氏
- ・第15回日本統計学会統計活動賞：国立大学法人滋賀大学
- ・第15回日本統計学会統計教育賞：一般社団法人日本品質管理学会 TQE 特別委員会、塩澤友

樹氏

- ・第13回日本統計学会研究業績賞：P.J. Brockwell氏・松田安昌氏（共同受賞）
- ・第12回日本統計学会出版賞：竹内啓氏
- ・第33回小川研究奨励賞：茂木快治氏
- ・第1回ISI東京大会記念奨励賞：今泉允聡氏、荻原哲平氏、小池祐太氏、菅澤翔之助氏、仲北祥悟氏



2.1 第24回日本統計学会賞 受賞のことは

小暮 厚之 (東京経済大学)

この度は日本統計学会賞を賜り、大変光栄に存じます。赤平昌文前会長をはじめ選考委員の先生方、推薦して頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。受賞の対象となった研究は、ベイズ統計の金融・保険リスク分野(アクチュアリアル・サイエンス)への応用というものです。主流から外れたこのような研究に目をかけて頂き、本当に有難く思います。この機会をお借りして、本研究にたどり着くまでの私の歩みを述べさせて頂きたいと思っております。

初めて統計学に出会ったのは、東北大学経済学部の竹内清先生のゼミでした。輪読した本はRichard Savageによるベイズ統計学入門書。ゼミ生全員がチンプンカンプンでした。それを見かねて、竹内先生がHoelの教科書に代えてくれました。こちらはスラスラと読め、なぜか「統計学は面白い」と思いました。最初にHoelの本を読んだら、「面白い」などとは思わなかったでしょう。

そのまま大学院に進学し、細谷雄三先生の教えを受けました。細谷先生はイエール大学から帰国して間もない頃で、実に颯爽としていました。統計学が魅力的に見え、私も海外で勉強したくなりました。細谷先生に推薦して頂き、何とか私もイエールに留学できることになりました。

イエールでは、John Hartigan先生の下でPh.D.論文を書きました。Hartigan先生はベイジアンですが、学生に自由に研究テーマを選ばせてくれました。私は、当時脚光を浴び始めていたAICに

触発されて、予測誤差の推定量に基づいてヒストグラムの級区間を設定する新たなルールを考案することにしました。しかし、研究がある程度進んだときに、Charles Stoneが同様なルールに対して漸近的最適性をエレガントに証明していることを知りました。かなりショックを受けましたが、諦めずに研究を続け、どうにか論文に仕上げることができました。この成果はAnnals of Statisticsに掲載されました。まさにビギナーズラックでした。

留学から帰国すると、時代はバブルでした。初めての勤務先である福島大学で森平爽一郎先生と出会い、金融の世界に目を開かされました。ちょうどその頃、刈屋武昭先生、三浦良造先生、高橋一先生、国友直人先生といった錚々たる方々が金融工学に参入したという噂を聞きつけ、私も後を付いて行くことにしました。

やがて時代は移り、バブルもしほみました。金融工学も厳密な科学としての数学的な側面が強調されるようになってきました。自らの力不足を感じると同時に、保険リスクの分野の方が統計学を活かせるように思いました。人口オーナス期に入った当時、静態的と想定されていた死亡率が、現実には時間と共に変動し、いわゆる長寿リスクを生じることが問題となっていました。長寿リスクを扱うには、統計モデリングが不可欠です。ただし保険への応用ですので、リスク評価についても考える必要があります。そこで、推定から予測そしてリスク評価まで一貫してベイズ統計の立場で行う枠組みを考えました。長寿リスクの評価を考える上で、かつて学んだ金融工学の知識が役に立ちました。かなり複雑なモデリングでしたが、

MCMC を使うとあっけなく答えが出る事にも驚きました。このMCMCの計算では、慶應SFCの教え子達に大いに助けてもらいました。その成果は、Insurance: Mathematics and Economics に掲載され、その後の研究の転機となりました。最近では、長寿化に伴う健康リスクや介護リスクにも関心を広げ、ベイズ統計のさらなる活用を考えています。

このようにして歩んで来た長い道のりの中で、上述した先生方に加えて、多くの研究仲間にも恵まれました。出会いの順にお名前を挙げさせていただきます。金澤雄一郎氏、照井伸彦氏、大森裕浩氏、寒河江雅彦氏、中妻照雄氏、神谷信一氏、田中周二氏、Jackie Li氏、皆様に改めて感謝申し上げます。

2.2 第15回日本統計学会統計活動賞 受賞のことは

竹村 彰通（滋賀大学データサイエンス学部）

この度、国立大学法人滋賀大学が日本統計学会統計活動賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。授賞式は滋賀大学が共催した今年の統計関連学会連合大会においておこなわれ、参加者の皆さんには滋賀大学のデータサイエンス学部が発展している様子を見ていただけたのではないかと思います。この受賞のことは私が書かせていただいておりますが、この受賞は滋賀大学の内外でデータサイエンス学部及び大学院の開設に向けて尽力いただいた多くの方々のおかげです。以下では一部の方のお名前のみあげておりますが、この場を借りて、まずこれらの方々に感謝の意を表したいと思います。

滋賀大学は2017年4月に日本初のデータサイエンス学部を設置しました。その設立構想は今から5年前の2014年の夏頃に始まったものです。それまで滋賀大学は経済学部と教育学部の2学部のみからなる大学であり、第3学部構想がずっと議論されていましたが、なかなか実現しない状況が続いていました。2014年の夏に日本学術会議情報学委員会E-サイエンス・データ中心科学分科会

（北川源四郎委員長）による提言『ビッグデータ時代に対応する人材の育成』が発表され、当時の佐和隆光前学長がこの提言に注目してデータサイエンス学部を提案して以来、データサイエンス学部設立構想が急速に具体化していきました。私自身は2015年5月に東京大学とのクロスアポイントメントの形で滋賀大学の兼任を開始し、2016年4月に専任となりました。同時に位田隆一氏が学長に就任し、また元総務省統計局長の須江雅彦氏が理事・副学長に就任し、データサイエンス学部の立ち上げを強力にサポートいただいています。

そして本年4月には、学部卒業生が出るより2年早く、これも日本初となる大学院データサイエンス研究科修士課程を開設しました。来年4月には博士後期課程も開設し、学部から大学院までをそなえたデータサイエンス教育研究拠点の形が完成することとなります。

滋賀大学データサイエンス学部では、データサイエンスの3要素として、統計学、情報学、及び価値創造をあげており、設立構想段階から統計学を重視した学部の設計をおこないました。学部のカリキュラムにおいても、例えば多変量解析、時系列解析、ベイズ統計、機械学習など、他の大学や学部では履修しないような統計学の専門的なトピックについて講義を提供しています。その意味で滋賀大学のデータサイエンス学部は統計学の体系的な教育をおこなう学部としても日本初となっています。今回の受賞もこのような統計学の体系的な教育を評価いただいたためと考えています。

一方で、情報学の教育についても充実をはかっており、学部設立後には画像分析や音声分析の専門家を採用するなど、ビッグデータ時代のデータ分析のニーズにあった情報学の教育をおこなっています。さらに第3の要素である価値創造については、多数の企業や自治体と連携し、実際のデータを用いたPBL演習を整備しています。幸い、滋賀大学データサイエンス学部は多数の企業や自治体から注目され、今年の4月現在で企業等との連携協定は40件以上、共同研究・委託研究を含めると延べ100件以上となっています。そして、企

業との共同研究によって外部資金を獲得し、それにより若手のスタッフの充実をはかっています。企業との共同研究、特にこれまで十分なデータ分析をおこなって来なかった企業との共同研究では、基本的な統計手法の適用がまず重要です。他方で、画像分析などの依頼も多く、データサイエンスをめぐる状況の変化も感じられます。

以上のように滋賀大学は統計学、情報学、価値創造のバランスのとれた教育を「滋賀大モデル」として提案しています。滋賀大学に続いて他の大学にもデータサイエンス学部が開設されていますが、滋賀大学としては以上のモデルを掲げて、データサイエンスのトップランナーとして教育研究を充実して行きたいと考えています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

2.3 第15回日本統計学会統計教育賞 受賞のことは

山下 雅代（一般社団法人日本品質管理学会 TQE 特別委員会）

この度は、日本統計学会統計教育賞という名誉ある賞を一般社団法人日本品質管理学会（JSQC）TQE（Total Quality Education）特別委員会に授賞下さり、委員一同、心より御礼申し上げます。

TQE 特別委員会は、統計の学習内容が30年振りに拡充された現行学習指導要領が平成20年・21年に告示されたことを機に、その基本理念である「生きる力」の育成に向け学校現場への展開に協力し、実社会における問題の解決に資する初等中等統計教育に重点的な支援活動を行うことを目的に、JSQC 内に2010年2月に設置された特別委員会です。主に初等中等教育への統計的問題解決教育の重要性や考え方、効果的な授業方法をシンポジウム・指導書・WEBなどを通して啓蒙・普及し、鈴木和幸委員長（電気通信大学名誉教授）の下、初等中等教育の教員への教育支援活動を推進して参りました。

当委員会の今日までの主な活動と成果は以下の通りです。

1. 産官学の有識者と初等中等の学校教育現場を

繋ぐ「科学技術教育フォーラム」を通算で8回実施し、述べ1000名以上の参加者がございました。

2. 世界における問題解決ストーリーの文献調査、および我が国の産業界の人材育成の研修知見に基づいた、初等中等教育における問題解決基本3フェーズ（現象把握、因果探究、対策実行）並びにこれに基づく事例を開発し、発信して参りました。特に、生徒が主体となり、楽しく、わかる教材を作って参りました。
3. 初等中等統計教育とQC検定との連携による“生きる力”の育成と日本の産業界の発展への基盤構築を行って参りました。
4. 文部科学省への提言を通して、初等中等教育における問題解決力育成の重要性を訴えて参りました。
5. 2010年より現在まで約180号に及ぶTQE報告書を電子配信し、統計教育への一般の方々への関心を喚起することに努めて参りました。
6. JSQCの活動・行事・問題解決事例を広報し、現実的な問題解決力向上の重要性とその方法の啓蒙普及を行って参りました。
7. 学校教育におけるプロセスの学びの重要性と初等中等教育スキーム（子供が主体、楽しさ、わかるの三指針）の啓蒙・普及に努めました。
8. 初等中等統計教育における「生きる力」育成への活動支援の一環として、JSQC設立40周年記念として設立された統計グラフ全国コンクールにおける日本品質管理学会賞の周知・徹底を図り、応募件数の増加とその質の向上に努めて参りました。

また、AI、ビッグデータ、IoTを中核とする第4次産業革命が世界的に進行しつつある中、2018年6月未来投資戦略2018「Society5.0」,「データ駆動型社会への変革」が閣議決定され、これに前後して新しい学習指導要領が公示されました。これにより2020年度から小中高と順次完全実施されます。今回の改訂では、小学校・中学校では算数科・数学科のそれぞれ各学年に共通した4領域のうちの1領域に“データの活用”が設けられ、そ

して高等学校では、数学科に“データの分析”と“統計的な推測”，情報科に“情報社会の問題解決”，“情報通信ネットワークとデータの活用”と“情報とデータサイエンス”が設けられ，小中高一貫の統計的問題解決教育が盛り込まれました。これを受け，これまで日本の品質管理界が培ってきた主体的・協働的な科学的問題解決の知を結集し，産官学の共創に向けて，“次世代への数学教育”，“情報，ICT，AI世代への教育”，“産官学の連携”などの目的・考え方・課題と問題点を明らかにし，新たな教育課程の円満な実現に向けて，貴学会統計教育委員会と連携を取りながら，協力していきたいと考えております。

なお，本委員会の活動の詳細は，JSQC 機関誌『品質』（Vol.45, No.4, 2015）[特集]「初等中等教育における問題解決力育成へ向けて」，ならびに同『品質』（Vol.48, No.4, 2018）～（Vol.49, No.1, 2019）[特集]「データ駆動型社会と新学習指導要領」を御参照下さい。

今後とも関係各位のご協力・ご鞭撻を賜りますよう，何卒宜しくお願い申し上げます。

受賞のことは

塩澤 友樹（岐阜聖徳学園大学）

この度は，名誉ある日本統計学会統計教育賞を授与していただき，誠にありがとうございます。今回の受賞は，これまでの授業実践や研究において御支援下さった多くの先生方，一緒に授業を創り上げてくれた多くの生徒達の協力があったからのものであり，この場をお借りまして心より感謝申し上げます。

私が統計学を学ぶきっかけとなったのは，筑波大学在学時に青嶋誠先生の研究室に所属したことでした。当時の同期は7人中4人が教員志望という事で，「サンプルサイズ」に関するゼミの準備のため，よくセミナー室や空き教室で時間を問わず議論していました。青嶋ゼミでの学びと先生の熱心な御指導が自分の統計学の土台となりました。大学院は数学教育学の道に進みましたが，「数学を活用するよさを子供達に伝えたい」という問題

意識から統計教育に関心を持ち，当時筑波大学にいらした清水静海先生の下，統計教育研究を始めました。清水先生は「数学を大切に下さい」とおっしゃることもあり，統計教育研究の傍ら，青嶋ゼミの後輩に混ざりベイズ統計学の勉強をさせていただき，「正規分布の歴史を生徒達に伝えたい」という思いから，筑波大学の小池健一先生に副論文の御指導をいただきました。ベイズ推測の尤度の考え方に苦戦したり，最小二乗法から正規分布の発見に感心したりと，少しではありましたが統計学の勉強を続けたことが，今回の業績に載せていただいた標本調査やベイズ推測の授業実践につながりました。学校現場に出てからも，都立学校の同僚や先輩の先生方，生徒にも恵まれ，悩むこともありましたが，統計教材や授業づくりを続けることができました。特に，まだ面識もなかった頃，研究発表を聞いてくださった静岡大学の裕元新一郎先生から研究会にお誘いいただいたことが，科研費のプロジェクトの中で新教材の開発や授業づくりを続ける転機となりました。今振り返ってみても，多くの先生方との出会いに支えられて，現在があります。

さて，平成29年，30年告示学習指導要領では小中高一貫して統計内容が充実し，小学校では，令和2年度から新たな教育課程が始まります。小学校ではデータの種類や目的に応じた統計グラフの選択，中学校では「数学Ⅰ」から中2段階への箱ひげ図の移行，高等学校では「数学Ⅰ」で新内容「仮説検定の考え方」，「数学Ⅱ」で30年ぶりに「仮説検定」等，数多くの変更がありました。一方，情報科に目を向けても，統計・データサイエンス内容が充実し数学科との連携が求められました。統計教育の充実が喜ばしい反面，学校現場では新たな対応が求められています。私も授業で新たな内容を扱う際，教材解釈や授業展開で悩むことが多くありました。だからこそ，今回の受賞を機に改めて身を引き締め，学校現場の先生方や子供達に統計のよさを実感してもらえるよう，統計教材や授業づくりに資する研究に尽力していきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろ

しくお願いいたします。

最後になりましたが、このような機会を準備して下さった日本統計学会の委員の先生方、関係の先生方に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

2.4 第13回日本統計学会研究業績賞 受賞のことば

P.J. Brockwell

I am extremely grateful to the Japan Statistical Society for the honor of this award and for providing the opportunity to present our results to the Japanese statistical community at such an important meeting. I shall treasure the beautiful plaque and certificate as souvenirs of this wonderful occasion.

受賞のことば

松田 安昌 (東北大学)

この度は、日本統計学会研究業績賞という名誉ある賞を、尊敬する Brockwell 先生と共同で受賞させていただいたことに心より感謝申し上げます。ここでは、感謝の言葉とともに、Brockwell 先生と共同研究にいたった経緯を書かせていただきます。

私が東京工業大学に大学院生として在籍していた1995年11月に、指導教官である藤井光昭先生が Brockwell 先生を東京工業大学に招かれ、1か月間ほどの滞在をアレンジされました。その際のセミナーでは、離散時系列 ARMA モデルを連続化した CARMA モデルについて紹介されていました。難しく理解できませんでしたが、観測点が irregular なデータには離散モデルよりも連続モデルをフィットした方がよいとの先生のコメントをよく覚えています。その後、空間データ解析に関心を持ち、空間データではデータポイントが irregular な場合がむしろ普通であることから、時系列 CARMA モデルを空間データに拡張すればよいのではないかと考えていました。2014年に別件で東北大学に Brockwell 先生を招く機会があり、CARMA モデルを空間データに拡張する考えを話

したところ、幸い興味をもっていただき、共同研究にいたりました。電子メールをやり取りしながらの論文作成は、偉大な先生と議論する得難い機会となりました。

この度の受賞は Brockwell 先生をはじめ、東京工業大学に先生を招かれた藤井光昭先生、東京大学において Brockwell 先生のご著書“Time Series: Theory and Methods”を一行ずつついでに教えていただいた矢島美寛先生のご尽力によるものです。ここに改めて感謝いたします。現在、CARMA モデルの多変量化に取り組んでおり、統計学および統計学会の発展に少しでも寄与することができれば幸いです。

2.5 第12回日本統計学会出版賞 受賞のことば

竹内 啓

私はもう長い間学会活動から引退しているので、学会の皆さんから忘れられた存在になっているものと思い、私が出版した本もみなさんの注目をひくこともないのではないかと考えていた。ところが日本統計学会の出版賞を下さるということで大変驚き、また嬉しく感じた次第である。関係のみなさんに心からお礼を申し上げたい。

統計学の歴史は、一般の学問分野の歴史とは変わっていると思う。特定分野の学問は、急速に進歩する時期と停滞する時期があってもいわば直線的に発展するものであるが、統計学はある時期に特定の応用分野についてその理論と分析方法が確立され、有益な成果が得られると、しばらく後にはその限界に達してしまい、次の時期には別の応用についてしばしば別の場所で新しい理論と方法が開発されるということが行われて、その間の発展は直線的ではない。時代とともに異なる名前と呼ばれる学問が形成され、盛衰をくり返すことになる。政治算術、国状学、社会物理学、社会統計学、生物測定学、統計的推測理論、統計的品質管理、計量経済学、計量心理学等々、これらは互いにほとんど独立な名目の学問であるようにも思われる。

しかしこれらはやはり「数」と「量」を用いて客観的に対象分野を分析するものとして、統計学の一つの形であったと思う。いいかえれば「統計学」というものはいろいろな形を取りながら発展して来たのだと思う。そうしてそれはいろいろな場所において、それぞれの歴史的状況の中で、社会的課題、学問的関心に応えるように、統計学がとった「形」であった。

私がこの本、或いはその前身である雑誌「統計」の連載で試みたのは、このような歴史と統計学の対応関係を、それぞれの時代の中心的な業績、或いは学者の著作を通して説明することであった。それによって「統計学」というものをより深く理解し、またその現在の課題と発展の方向を見出すことができるのではないかと考えたのである。

従ってこの本のテーマは「歴史と統計学」であって「統計学の歴史」ではない。もしアカデミックな「統計学通史」を書くとするれば古典的文献については一々原典に当たるなどの手続きが必要になる。私には到底そのようなエネルギーはないので、信用できると思われる後世の版や「学史」の中での引用、或いは翻訳によった。(ただし引用についてはその典拠を示した。)

私の試みは、ある意味では極めて野心的であったといえるかもしれない。この本がその課題に対して満足すべき答を与えているとは到底いえないことは明らかである。私としてもまだ書き加えたいことは多くある。しかし私自身がこの本を書く中で学んだことは大きかったと思う。

またいろいろな本を参照する中で、多くの興味ある文章を発見した。その一つだけあげると(191ページ)、ケトラーは「医者診断するとき、平均人を参照せざるを得ない。しかし身体には個人差があるから、このことは重大な誤りを生む危険がある。だから人は健康な時にも医者にかかって、自分の身体の個性を理解してもらっておくべきである」といつているが、これは現代でもよくあてはまることではなかろうか。

最近、ビッグデータが出現し、それを分析利用する「データ・サイエンス」がもてはやされてい

る。このことは統計学がまた新しい形を作り上げる機会が開かれていることを意味している。この際統計学の新しい方向を考える上で、私の本から何かのヒントを汲み出して頂ければ望外の幸いである。

2.6 第33回小川研究奨励賞

受賞のことば

茂木 快治 (神戸大学)

この度、歴史と名誉のある日本統計学会小川研究奨励賞を賜り、大変光栄に思うとともに恐縮しております。小川潤次郎先生とご家族の皆様には心より御礼申し上げます。また、私を第33回受賞者として選んで下さった日本統計学会の選考委員会の皆様に深謝します。

私は学部上級生の頃から経済の時系列分析を学び始めました。その後、ノースカロライナ大学チャペルヒル校経済学部博士課程への留学中、Mixed Data Sampling (MIDAS, マイダス) という斬新な時系列分析と出会い、それを博士論文研究のメインテーマに据えました。その研究成果をまとめた一連の学術論文が小川研究奨励賞の受賞対象となったことは、私にとって望外の喜びです。これも学士・修士課程の指導教員である貞廣彰先生(早稲田大学名誉教授)と、博士課程の指導教員でありMIDASの開祖でもあるProf. Eric Ghysels (UNC Chapel Hill)の懇切丁寧なご指導のおかげであり、感謝と尊敬の念を深めております。

また、Prof. Jonathan B. Hill (UNC Chapel Hill)、羽森茂之先生(神戸大学大学院経済学研究科教授)、Prof. Zheng Zhang (Renmin University of China)をはじめとする共同研究者の皆様からも、MIDASやその他の研究プロジェクトに関して日々ご指導頂いており、誠にありがたく考えております。

さて、MIDASとは、観測頻度の相異なる時系列データの計量分析を意味します。例えば、失業率と国内総生産(GDP)の間の時系列的な相互依存関係を分析したいとします。多くの国において、失業率のデータは毎月公表されるのに対して、GDPのデータは四半期に一度しか公表されませ

ん。従来の時系列分析は、分析対象の変数の観測頻度が統一されている状況を前提としています。そのため、分析の前段階として月次の失業率を四半期ベースに集計する必要がありました。このようなデータの集計化は情報の損失を招き、分析精度を低下させます。

MIDAS は、データの集計を回避し、月次データは月次のまま、四半期データは四半期のまま分析を行います。その方法は、月次データを各四半期の第1月、第2月、第3月に分割し、それらをあたかも3変数の四半期データであるかのように取り扱うというものです。これは言われてみれば単純明快な発想ですが、長い間人々の盲点となっていた「コロンブスの卵」です。MIDAS は、与えられたデータを集計することなく使い切り、最大限の統計的精度を確保します。

受賞論文の学術的貢献を要約すると、次のとおりです。第一に、mixed frequency vector autoregression (MF-VAR) におけるグランジャー因果性を定義し、その検定方法を提案しました。MF-VAR は MIDAS の着想に基づく VAR であり、今日では応用マクロ経済分析の画期的ツールとして広く認知されています。局所検出力 (local power) の比較やモンテカルロ実験の結果、提案の因果性検定が従来の因果性検定よりも高い統計的精度を有するということが明らかになりました。第二に、変数の集計がグランジャー因果性の有無に及ぼす影響を理論的に考察しました。第三に、提案のグランジャー因果性検定を日米のマクロ経済変数に応用し、単一の観測頻度に基づく従来の因果性検定では得ることのできない新たな知見を得ました。これらの研究成果をまとめた論文は、Journal of Econometrics (2 編) および North American Journal of Economics and Finance に採択されました。

今回の受賞を励みとしてより一層精進し、時系列分析の研究発展に少しでも貢献できるよう努力します。今後も変わらぬご指導を頂ければ幸甚に存じます。

2.7 第1回 ISI 東京大会記念奨励賞

受賞のことは

今泉 允聡 (統計数理研究所)

この度は、大変栄誉ある賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような機会を作っていただいた先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。2019年にマレーシア・クアラルンプールで開催されました ISI World Statistics Congress におきまして、私は若手統計学者のための Computational Statistics and Applications セッションに招待していただき、Statistical estimation for non-smooth functions by deep neural networks なる研究を発表しました。本研究は、近年急速に実用化が進んでいる深層学習につきまして、その原理を解析するための統計理論を構築したもので、将来的に深層学習の効率的な運用の実現を目指しています。セッションにおいては、同じく研究発表を行った多くの若手研究者とのつながりを作ることができ、大変貴重な機会となりました。また、私は ISI への参加は初めてだったのですが、普段の研究集会・学会と違って世界中の公的機関の実務担当者が参加している様子を目の当たりにし、統計が研究だけでなく社会と直接つながっている様子の片鱗を学ぶことができました。

受賞のことは

荻原 哲平 (東京大学)

この度は第1回 ISI 東京大会記念奨励賞を授与頂き、誠に光栄でございます。これまでご指導くださった多くの先生方や支援してくれた家族に感謝申し上げます。

私はこれまで主に確率過程の統計解析について研究し、特にパラメータ付確率過程モデルに対する尤度・疑似尤度解析を中心に研究してきました。ISI WSC では“Parameter estimation for misspecified diffusion processes with noisy, nonsynchronous observations” というタイトルで、高頻度株価データを解析する際に現れる観測時刻の不一致性や観測ノイズの存在、統計モデルの misspecification などを考慮した時の拡散過程モデルの最尤型推定量

の漸近理論や、ニューラル・ネットワークを用いて東京証券取引所の高頻度株価データから株価構造を学習する実証分析を紹介しました。会場からは拡散過程部分の拡張可能性等に関する質問等いただき活発な議論をすることができました。

この度の受賞を励みに今後も日本の統計学界に貢献できるよう、より一層精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

受賞のことは

小池 祐太 (東京大学)

このたびは、第1回 ISI 東京大会記念奨励賞を授与いただき誠にありがとうございます。ISI WSC 2019では、立命館大学のコハツ先生にご招待いただき、「Perspectives on Statistical Methods for Time Dependent Processes」というセッションにて「Asymptotic mixed normality of realized covariance in high-dimensions」という演題で発表いたしました。このセッションは、名前の通り確率過程の統計推測の研究者で構成されるセッションで、私の他に2名の講演者がいらっしゃったのですが、2名とも私は面識がなく研究内容も存じ上げていなかったため、今回の会議にて知り合いとなり、また講演を拝聴することができたため、非常に貴重な機会を得ることができました。

この度の受賞は、セッションに招待して下さったコハツ先生はもちろんのこと、これまで関わった多くの方々のお力添えの賜物だと感じております。今回の受賞を励みにさらに精進していく所存ですので、今後ともよろしく願いいたします。

受賞のことは

菅澤 翔之助 (東京大学)

この度は ISI 東京記念奨励賞に選出いただき、誠にありがとうございます。これまで ISI に参加する機会がなかったため、今回の受賞がとても良い経験となりました。さらに、参加者やセッション

数が非常に多く、国内外の知人が多く参加しており、とても良い交流・情報交換をすることができました。現地では「Robust Estimation and Joint Selection in Linear Mixed Models」というタイトルで発表をさせていただきました。これはオーストラリア国立大学の Francis Hui 先生と Alan Welsh 先生との共同研究で、私が2017年と2018年に2人を訪問したことを機会に始まったプロジェクトです。今回の受賞を機に、このプロジェクトをさらに発展させ価値の高い成果として発信できるよう、引き続き取り組んでいきたいと思っております。

受賞のことは

仲北 祥悟 (大阪大学)

この度は第1回 ISI 東京大会記念奨励賞を授与いただき、誠にありがとうございます。

今回の受賞について、まず共同研究者であり指導教員でもある内田雅之先生に、そして私を支えてくれている私の家族・婚約者とその家族・友人達に、この場を借りて御礼申し上げます。

受賞の対象となりました研究発表の演題は 'adaptive estimators for noisily observed diffusion processes' で、エルゴード的拡散過程 (潜在過程) にノイズを加えた形で観測された高頻度時系列データに基づく潜在過程のパラメータ推定について議論したものです。このような統計手法は、今回発表に含めた風速データ解析だけでなく脳波データ解析などにも少なからず寄与するものと期待しております。

発表の場では、問題設定を明確にし、実例を示して分かりやすい説明を心がけました。質疑応答により有益なコメントを頂戴し、発表終了後に複数の方と議論することができました。

最後に若輩者であるにもかかわらず私を選定して戴きました審査委員会の皆様方に厚く御礼申し上げます。

この受賞を励みに今後一層精進して参ります。

3. 第14回日本統計学会春季集会のお知らせ（第一報）

山下 智志（日本統計学会理事長）

稲葉 由之（理事：大会・企画・行事担当）

小山 慎介, 田上 悠太, 間野 修平, 本橋 永至（企画・行事委員会委員）

第14回日本統計学会春季集会を下記の要領で開催いたします。

春季集会には、口頭発表セッションとポスターセッションを設ける予定です。口頭発表のセッションは招待セッションを基本とします。ただし、会員の皆様からのセッションの提案もお受けします。セッションのご提案は、2019年11月8日（金）までに、下記稲葉宛にお知らせください。

yoshiyuki.inaba@meisei-u.ac.jp

会場などの関係で、ご希望に沿えない場合がございます。あらかじめ、ご了承ください。

ポスターセッションではポスター発表を広く募集いたします。申し込み締め切りは2月中旬を予

定しています。詳細は次号の会報No.182でご案内いたします。また、会報No.176でお知らせしましたように、昨年度のポスターセッションから、発表者への旅費の支援と表彰の審査対象は日本統計学会会員（ポスター発表申し込みまでに入会の手続きが完了している方）に限定することになりましたので、併せてご留意をお願いいたします。

多数の会員の皆様の参加をお待ちしております。

<日本統計学会第14回春季集会>

・期日：2020年3月14日（土）

・会場：横浜市立大学金沢八景キャンパス YCU スクエア（神奈川県横浜市）

・参加費：無料（懇親会は有料）

4. 第2回細谷賞の公募

照井 伸彦（東北大学）

東北大学大学院経済学研究科では、細谷雄三名誉教授の統計学界における教育・研究への貢献を記念して、広く人文・社会科学分野における若手研究者のデータ科学研究を奨励するため、細谷賞を創設しました。このたび第2回細谷賞の公募を開始いたします。本賞は、東北大学須永特定基金より寄付を受け日本統計学会の後援により実施するもので、受賞者には研究奨励金（10万円）を授与します。人文・社会科学におけるデータ科学の理論および応用研究に努める多くの若手研究者の応募を期待しています。

1. 応募資格

(1) 過去3年程度以内に、国内外の学術誌に掲載された人文・社会科学分野におけるデー

タ科学（統計分析・計量経済分析を含む）に関連する論文（単・共著ともに可）の著者であること

(2) 論文出版時点において40歳未満の者。

2. 応募期限 2020年3月31日必着

3. 応募書類

(1) 申込用紙

(<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/hosoya.html>) よりダウンロード

(2) 審査対象とする論文1編

4. 送付／問合せ先

応募書類をPDFファイルにまとめてEmailに

て下記宛に送付のこと

dssr-sec@grp.tohoku.ac.jp

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

東北大学大学院経済学研究科サービス・データ科学研究センター

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/>

5. 発表の通知 2020年6月(予定)

11月(予定)に受賞者を東北大学に招待し、表彰式および受賞記念セミナーを行います。

5. 理事会・委員会報告 (2019年7月13日)

日時 2019年7月13日(土曜日)

午後0時00分～午後0時30分

場所 早稲田大学早稲田キャンパス 3号館8階3-811教室

理事の総数 13名 出席理事の数 11名

監事の総数 3名 出席監事の数 2名

出席者:

理事: 川崎茂会長, 山下智志理事長, 伊藤伸介(庶務), 玉置健一郎(庶務), 青嶋誠(JJSD), 吉羽要直(会誌編集和文), 小池祐太(広報), 稲葉由之(大会・企画・行事), 松田安昌(国際), 前田忠彦(渉外), 瀬尾隆(渉外)(以上11名, カッコ内は役割分担)

監事: 赤平昌文, 中西寛子

欠席: 吉田靖(会計), 汪金芳(国際), 岩崎学(監事)

オブザーバ: 西郷浩(前理事長)

第1議案 常設委員会における委員の追加について

常任委員会のメンバーを決める必要があることを確認した。

JJSD 支援委員会については, [第4議案 JJSD 支援委員会について] で委員会のあり方について議論することとなった。

企画・行事委員会

小山慎介委員, 田上悠太委員, 間野修平委員, 本橋永至委員を追加(2019年6月8日付)することについて承認を得た。

渉外委員会

酒折文武委員(若手科学ネットワーク), 山下智志委員(横幹連合代議員)を追加(2019年6月8日付)することについて承認を得た。

学会活動特別委員会

足立浩平委員, 川崎茂委員, 金藤浩司委員, 宿久洋委員を追加(2019年6月8日付)することについて承認を得た。

学会組織特別委員会

西山慶彦委員, 松井知子委員, 山下智志委員を追加(2019年6月8日付)することについて承認を得た。

統計教育委員会

伊藤聡委員, 竹村彰通委員, 田畑耕治委員, 前園宜彦委員を追加(2019年6月8日付)することについて承認を得た。

第2議案 常設委員会における委員の再任について

渉外委員会

酒折文武委員を再任(2019年6月8日付)

統計教育委員会

青嶋誠委員, 青山和裕委員, 縣俊彦委員, 浅井学委員, 新井宏尚委員, 飯田博和委員, 和泉志津恵委員, 伊藤彰彦委員, 伊原一委員, 岩崎学委員, 小口祐一委員, 小野英夫委員, 景山三平委員, 片岡正昭委員, 狩野裕委員, 鎌倉稔成委員, 川崎茂委員, 金藤浩司委員, 菊池進委員, 倉田博史委員, 栗原考次委員, 酒折文武委員, 櫻井尚子委員, 迫田宇広委員, 佐藤朋彦委員, 柴田義貞委員, 末永勝征委員, 杉山高一委員, 瀬尾隆委員, 高橋由武委員, 竹内光悦委員, 竹田裕一委員, 田中豊委員, 田村義保委員, 垂水共之委員, 椿広計委員, 中條安芸子委員, 中西寛子委員, 大戸隆信委員, 根本二郎委員, 橋本紀子委員, 馬場康維委員, 馬場善久委員, 濱田宗雄委員, 深澤弘美委員, 福井武弘委員, 藤井良宜委員, 藤原丈史委員, 植田直木委員, 松原望委員, 丸山久美子委員, 三浦由己委員, 水田正弘委員, 南美穂子委員, 宮岡悦良委員, 三宅章彦委員, 村上正康委員, 村上征勝委員, 門間麻紀委員, 宿久洋委員, 柳沢文敬委員, 矢野一幸委員, 芳沢光雄委員, 美添泰人委員, 吉田朋広委員, 依田源委員, 渡辺美智子委員を再任(2019年6月8日付)

第3議案 2019年度補正予算について

山下理事長より, 資料に基づき, 2019年度補正予算を提案した。

第4議案 JJSD 支援委員会について

第4議案は委員会の報告で議論するので省略した。

第5議案 会員の入退会

山下理事長より、回収資料に基づき、入退会希望者が紹介され、審議の結果、承認された。

一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時：2019年7月13日（土曜日）

午後0時30分～午後3時20分

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 3号館 8階 3-811
教室

出席：理事11名、監事2名、委員0名、計13名

川崎茂会長、山下智志理事長、伊藤伸介、玉置健一郎、青嶋誠、吉羽要直、小池祐太、稲葉由之、松田安昌、前田忠彦、瀬尾隆、赤平昌文（監事）、中西寛子（監事）
欠席：吉田靖、汪金芳、岩崎学（監事）

<報告事項>

1. JJSD 支援委員会

青嶋委員長より、JJSDのこれまでの刊行状況と最新号の編集状況について報告があった。

2. 和文誌編集委員会

吉羽委員長より和文誌第49巻第1号の編集状況について報告があった。

3. 大会委員会

稲葉委員長から2019年度統計関連学会連合大会の状況について報告があった。

4. 企画・行事委員会

稲葉委員長から2019年度の日本統計学会春季集会の状況について報告があった。

秋くらいから春季集会の企画を立てていきたい。セッションの企画があったら、ご連絡いただきたい。

5. 庶務委員会

玉置委員長より、役員・代議員協議会が9月8日の18時30分から彦根勤労福祉会館で開催であること、2019年度統計関連学会連合における企画セッションについて報告があった。また、以下の後援の承諾についての報告もなされた。

(1) 第10回データビジネス創造コンテト

主催：慶應義塾大学 SFC 研究所 データビジネス創造・ラボ

(2) データサイエンティスト協会6th シンポジウム～実務者が集うデータサイエンスの最前線

主催：データサイエンティスト協会

(3) 人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもん

こん2019）

主催：情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会
(4) 第7回青森県統計教育セミナー

主催：青森県

6. 広報委員会

小池委員長より日本統計学会会報が編集中であり、次号会報が7月に刊行される旨の報告があった。

7. 国際関係委員会

赤平日本統計学会前会長より、イタリア統計学会からの招聘による国際会議 SIS2019への出席について報告があった。

8. 渉外委員会

前田委員長より、科研費（研究成果公開促進費）の執行予定について報告があった。また、山下理事長より、Springer社との打合せの内容について報告があった。

9. その他

山下理事長より、「データサイエンス研究教育を支える教員創出の16か年計画」、理事会メーリングリスト、および公的統計に関する臨時委員会報告書の学会ウェブページへの掲載について報告があった。

<審議事項>

1. JJSD 支援委員会

特になし

2. 和文誌編集委員会

特になし

3. 大会委員会

特になし

4. 企画・行事委員会

特になし

5. 庶務委員会

特になし

6. 広報委員会

特になし

7. 国際関係委員会

松田委員長より脇本セッションの後継セッションとして、ヤングリサーチーズセッションの設置の提案があり、それに関する旅費等の経費を科研費から支出することについて承認された。

8. 渉外委員会

松田国際関係委員長より、Brockwell先生の旅費について執行計画が出され、旅費の支出について了承が得られた。

9. その他

特になし

6. 2019年役員・代議員協議会記録

伊藤伸介・玉置健一郎（日本統計学会庶務担当理事）

日時：2019年9月8日（日）午後6時30分～午後8時00分

場所：彦根勤労福祉会館 3階 中ホール1・2
参加人数 27名

議題

1. 会長挨拶
2. 理事および委員の交代について
3. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについて
4. 第14回春季集会について
5. 科学研究費の取得について
6. JJSD 発行業務に対する科研費投入スキームについて
7. JJSD の広報について
8. 統計検定の改革について
9. 公的統計に関する臨時委員会の報告書について
10. 統計教育者育成事業について
11. その他（質疑応答、情報提供等）
 - ・理事会報告
 - ・委員会報告
 - ・今後の予定

7. 博士論文・修士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を原稿到着順に紹介いたします。(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月の順に記載いたします。

博士論文

- (1) 陸超（リク・チョウ） (2) 博士（商学） (3) 早稲田大学 (4) Estimation and Prediction of Financial Return Volatilities Using Dynamic Volatility Models (5) 坂野慎哉 (6) 2019年9月
- (1) 和田裕一郎 (2) 博士（情報科学） (3) 名古屋大学 (4) Study of Prediction on Manifolds with Almost No or No Labeled Data (5) 主査：酒井正彦（名古屋大），指導教員：金森敬文（東工大） (6) 2019年9月18日

修士論文

- (1) Yin-Chen Wang (2) 理学修士 (3) 国

- 立中央大学（台湾） (4) A general class of multivariate survival models derived from frailty and copula models: application to reliability theory (5) 江村剛志 (6) 2019年7月
- (1) Ting-yu Lin (2) 理学修士 (3) 国立中央大学（台湾） (4) A shrinkage robust ridge estimator with an intercept term (5) 江村剛志 (6) 2019年7月
- (1) Jiun-Huang Hsu (2) 理学修士 (3) 国立中央大学（台湾） (4) Performance of a two-sample test with Mann-Whitney statistics under dependent censoring with copula models (5) 江村剛志 (6) 2019年7月
- (1) Xinwei Huang (2) 理学修士 (3) 国立中央大学（台湾） (4) Likelihood-based inference for copula-based Markov chain models for continuous, discrete, and survival data (5) 江村剛志 (6) 2019年7月

8. 新刊紹介

会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

●青嶋誠・矢田和善『高次元の統計学』共立出版、2019年4月、2200円＋税

内容紹介：高次元データを扱うには、これまでの統計学にあった多変量解析や機械学習とは異なる、新しい発想が必要になる。そこで考案されたのが、高次元統計解析である。本書は、高次元統計解析に関する本邦初の解説書である。

●Annalyn Ng・Kenneth Soo（上藤一郎訳）『数式なしでわかるデータサイエンス ビッグデータ時代に必要なデータリテラシー』オーム社、

2019年7月、2400円

●Masanori Sawa, Masatake Hirao, Sanpei Kageyama『Euclidean Design Theory (JSS Research Series in Statistics)』Springer, 2019年10月、7,014円（税込）

内容紹介：本書は、cubature 公式やデザインの理論を再生核理論の枠組みでまとめた初の専門書であり、球体上の最適計画やカーネル法の特徴写像の明示的構成など、統計的応用にも触れている。デザイン理論とその周辺の数学者、実験計画法を数理的に体系立てて理解したい統計学者に向けて執筆された書である。

9. 受賞紹介

会員からの投稿による各種受賞の紹介記事を掲載します。

●ABRAHAM WALD PRIZE in Sequential Analysis 2019

受賞者：青嶋 誠（筑波大学数理物質系教授）、矢田 和善（筑波大学数理物質系准教授）、中山 優吾（筑波大学大学院数理物質科学研究科 D3）

受賞日：2019年6月19日

10. 学会事務局から

学会費払込のお願い

2019年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。また、クレジットカードでの学会費払込も受け付けております。お申込みは学会ホームページよりお願いいたします。（<https://www.jss.gr.jp/fec/>）。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

公益財団法人統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当

Tel & Fax：03-3234-7738

E-mail：shom@jss.gr.jp

入会承認

宇野大我, 小田秀匡, 梶谷義雄, 川村亮太, 木室孝輔, 佐藤洋子, 高田正彬, 原田和治, 松島佑樹, Robert Clark, 丸善雄松堂(株) (敬称略)

退会承認

吉岡正博 (敬称略)

現在の会員数 (2019年8月7日)

名誉会員	15名
正会員	1,404名
準会員	2名
学生会員	65名
総計	1,486名
賛助会員	17法人
団体会員	8団体

11. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

● 来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

● 博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月 をお知らせください。

● 求人案内 (教員公募など)

● 研究集会案内

● 新刊紹介

著者名, 書名, 出版社, 税込価格, 出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。

● 会員活動紹介 (叙勲・受章, 各種受賞等)

できるだけ e-mail による投稿, もしくは, 文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先 :

〒153-8914 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院数理科学研究科

小池 祐太 宛

E-mail : koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用 e-mail アドレス)

- 統計学会ホームページ URL :
<https://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL :
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL :
<http://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス :
meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス :
koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス :
shom@jss.gr.jp